京大病院通院の女性死亡、７３８倍の高濃度薬を処方

10/4(水) 5:24 配信

　京都大学医学部附属病院で体に必要な物質、セレンを処方された患者がその後、死亡していたことが分かりました。濃度が通常の７３８倍あったということです。

　京大病院に通院中の６０代の女性が先月２６日、処方されたセレン注製薬を自宅で投与した後に背中に痛みを訴え翌２７日に死亡しました。病院が調べたところ、処方されていたのは濃度が通常の７３８倍のセレンで、この投与が死因に繋がった可能性が高いとみて調査中だということです。

　２５日にもセレンを処方された別の１０代の患者が変色などに気付いて病院に連絡し、高濃度のセレンが混入されていたことがわかっています。

　セレンは医薬品の販売がなく京大病院では自ら作製しているということです。病院は作製過程で過失があったことを認め遺族側に謝罪しました。(04 日 04:05)